

「育児不安」の再検討

—子ども虐待予防への示唆—

教育心理学コース 渡 邊 茉奈美

The Review of "Parental Anxiety"
—To Suggest the Prevention for Child Maltreatment—

Manami WATANABE

We have to consider the effective program to prevent our children from child maltreatment because child maltreatment is increasing. What is the most effective for every parent? I think every parent has more or less parental anxiety. So the preventing program focusing on it can be effective for every parent.

In this paper, I reviewed the studies of parental anxiety. Then I found the parental anxiety affects the parenting misbehavior and that it is changing with time. For example, there may be anxiety about abusing as everyone knows "child maltreatment" by the media.

That is why I suggest that we should hear the real parents' voice to know what kind of anxiety they have. If we can know it, we are making the program of primary prevention of child maltreatment that focuses on it.

目 次

- 0. はじめに
- 1. 「子ども虐待」研究の紹介
 - A. 「子ども虐待」の定義
 - B. 虐待のリスク因子
 - C. 子ども虐待の一次予防
- 2. 「育児不安」への着目と定義
 - A. 「育児不安」への着目
 - B. 「育児不安」の定義
- 3. 「育児不安」の再考
 - A. 「育児不安」尺度の検討
 - B. 「育児不安」研究の動向
 - C. 「育児不安」の新たな形
- 4. 子ども虐待予防への示唆
- 5. 謝辞
- 6. 注及び参考文献

0. はじめに

「子ども虐待」という問題は近年ますますその残酷さを増しているといった印象があり、メディアでも多く取りあげられている。児童相談所の虐待相談対応件数を見ても、その数は平成2年度時点で1,101件だったものが平成22年度には55,152件と、20年間で約

50倍の増加となっているというのが現状である¹⁾。さらに、平成22年度に関しては、東日本大震災のため、宮城県と福島県を除く45都道府県の集計値となっている。つまり、単純に50倍というわけではなく、これより尚多い可能性が高いということに注意しなければならない。この「数」に関しては様々な議論がされており、そもそもこれは「相談対応件数」であり、虐待の実数を表すものでないとか、単に児童虐待防止等に関する法律の制定等による「虐待」の定義の明確化やメディアの普及により「虐待」という概念が社会で構築されたことによる世間の目の先鋭化²⁾といったことが言われる。しかし、少なからずこの「数」が社会において「問題」として扱われているという状況に鑑みて、筆者は「虐待」を一つの忌々しき「問題」として捉えた上で本論を進めたいと考える。というのは、少なくとも子どもは、虐待により様々な影響を受けている^{3) 4) 5)}という事実は変わらないため、そのような事態を予防する必要があると考えるからである。

そこで本論文では、レビューを通して最終的に、子ども虐待の予防への示唆を得ることを目的とする。従って、まずは子ども虐待に関する主なトピックについて簡単に先行研究の知見を紹介する。その上で、子ども虐待について広く、多くの親を対象に予防することの必要性和、そうなった時、より一般の親が持ち

得る「育児不安」に着目することの意義を見出し、実践への示唆をしていきたい。

1. 「子ども虐待」研究の紹介

A. 「子ども虐待」の定義

まず、虐待研究の歴史の古い、アメリカにおける児童虐待の定義を参照しよう。アメリカにおいては、虐待を身体的暴力・身体的並びに情緒的放置・情緒的虐待・性的虐待に分類し、Child Abuse Prevention and Treatment Act of 1974において「児童虐待並びに放置とは、児童の健康や福祉が害されたり、もしくはおびやかされるような環境のもとで、児童の福祉に対し、責任を持つべき人による、18歳未満の年齢の児童の身体的もしくは精神的傷害、性的虐待、怠慢な取り扱い、もしくは不当な取り扱いを意味する。」と定義されている⁶⁾。また、Keeping Children and Families Safe Act of 2003では「親や養育者の誤った行動で、それは死、深刻な身体的または感情的被害となるような行動、性的虐待または搾取、または行動をしないことにより深刻な被害のリスクとなり得るようなこと」と定義されている。Centers for Disease Control and Prevention (CDC)では、これまでの4分類に非統制というカテゴリーを加え、5分類されており、身体的虐待が「身体的に怪我をするような子どもに対する身体的力の行使」、性的虐待が「養育者による性行為、性的接触、搾取（性接触なし）」、心理的虐待は「子どもに価値がない、不完全、愛していない、望んでいない、危険だ、または他人の要求を満たす時だけ価値があると養育者が意図的に伝えること」、ネグレクトは「子どもの基本的な身体的、感情的、医療的、教育的必要を養育者により満たされないこと」、非統制は「子どもの感情的、発達の必要なものを与えられる家の内外で子どもの安全を確保しないこと」と定義される⁷⁾。

では、我が国ではどのように定義されているのか。以下にその最も公的な定義と思われる、「児童虐待の防止等に関する法律」（2004年改正）の一部を掲載する。

第二条 この法律において、「児童虐待」とは、保護者（親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護するものをいう。以下同じ。）がその監護する児童（十八歳に満たない者をいう。以下同じ。）について行う次に掲げる行為をいう。

一 児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。

二 児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。

三 児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食または長時間の放置、保護者以外の同居人による前二号または次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。

四 児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力（配偶者（婚姻の届出を出していないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む）の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。）その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。

アメリカの法上の定義と、我が国における法上の定義を比較すると、どちらも18歳未満に対する保護者による不適切な養育行動を「児童虐待」と定義しており、身体的虐待・情緒的虐待・性的虐待・ネグレクトの4つに分類しているということがわかる。さらに、法上では明記されていないが、その行為に意図があったか否かについて言及する定義が考えられる⁸⁾。つまり、その子が嫌いだから、憎いから、意図的にするから虐待とするのか、そうではなく、親がいくら一生懸命でも、その子をかわいいと思っていても、子ども側にとって有害な行為であれば虐待とするのかということである。

ここで着目すべきは「虐待」ということばの使い方もかもしれない。「虐待」の訳語であるAbuseには、「誤用、濫用」という意味があり、腕力、知力、社会力、武力、権力を持つ者が、その力を誤用したために起きる事柄に関して使われる。従って、「むごい扱い」という意味の「虐待」という語には違和感があると示唆されている⁹⁾。そこで「child maltreatment」すなわち「不適切な養育」という語が採用されることが多くなっている。「虐待」ということばが加害者の行為をさすように受け取られがちであるのに対し、「不適切な養育」というのはその子どもにとって適切かどうか判断されることであり、子ども中心の見方がしやすい。また、「虐待」ということばは身体的虐待や性的虐待などのcommissionとしての虐待（積極的虐待）のイメージが強く、子どもにとって重要なomissionとしての虐待（ネグレクトやDVの目撃）が軽視されがちであるとも言われる¹⁰⁾。この、「不適切な養育」については、厚生労働省児童家庭局による試作（1999）で「18歳未

満の子どもに対する、大人、あるいは行為の適否に關する判断の可能な年齢の子ども（およそ15歳以上）による、身体的暴力、不当な扱い、明らかに不適切な養育、事故防止への配慮の欠如、ことばによる脅かし、性的行為の強要などによって、明らかに危険が予測されたり、子どもが苦痛を受けたり、明らかな心身の問題が生じている状態。」と定義されている¹¹⁾。従って、「不適切な養育」ということばを用いることにより、その行為に意図があったか否かというより、結果として子どもにとって不適切な影響を与えたかどうかということが注目されるようになった。

ここで、これらの法律や先行研究上の定義を受け、本論文では「子ども虐待」について次のように定義したいと考える。

客観的に子どもにとって「不適切」と判断できるような、養育者による行動。具体的には、過度な体罰や、異常な言葉による暴力、または無視や放置、養育拒否、性的加害等を含む。ただ、「不適切」かどうかの判断基準は判断者の主観に委ねられるため、個人差があるということは忘れてはならない。

B. 虐待のリスク因子

では次に、子ども虐待がどうして起こっているのか、そのメカニズムについて簡単にまとめておこう。「メカニズム」と言っても、最初に述べてしまえば、子ども虐待が起こるそれというのは明らかとされていない。というのには、次のような理由が考えられる。まず、子ども虐待に関わる変数が多すぎる。多くの変数が複雑に相互作用することによって子ども虐待は引き起こされており¹²⁾、同じ状況下にあるように見えても虐待に至る親とそうでない親が存在することからも、結局ケースバイケースであると言える¹³⁾。また、それらについての詳細な検討というのが、倫理的な問題などにより行いにくいということも理由として考えられる。では、子ども虐待がなぜ、どのように起こるのかということについて先行研究でどのように扱われているのか。それは、虐待を引き起こすリスク因子を検証することによって説明されている。そこで、本節ではそのリスク因子について、先行研究で得られたものを、Belsky (1978)¹⁴⁾の分類に従って、親の持つリスク因子、子どもの持つリスク因子、社会の持つリスク因子という順で列挙する。

まず、親の持つリスク因子としてはどんなものが挙げられているか。これは非常に多く、親の健康状態や、特性、生育歴など様々である。その中でも一時

最も注目されたものとして、「虐待の連鎖」というものがある^{5) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25)}。これというのはつまり、虐待をされていた人は、連鎖的に自分の子どもにも虐待をするということである。この虐待の連鎖については主に回顧的な自己報告式の質問紙を用いて、その連鎖率を出すという手法が取られた研究が為されている。この連鎖率については研究によって非常にばらつきがあるが、一般的に $30 \pm 5\%$ とされている。つまり、虐待をされていた人のうち $30 \pm 5\%$ の人々がまた自分も親になった時、虐待をするというわけである。この「数」についてもやはり多いと見るか少ないと見るか議論が分かれるところでもある。ただ虐待の連鎖についてはここまでの紹介にとどめようと思う。その他の親の持つリスク因子についても以下に列挙する。抑うつ^{14) 19) 25) 26) 27)}、アルコール依存^{5) 13) 14) 15) 19) 26) 27)}、妊娠中の喫煙²⁸⁾、母親の精神異常^{5) 13) 19) 21) 29) 30)}、精神的に不安定¹³⁾、解離傾向³¹⁾、知的障害^{13) 19)}、深刻な母親の病気²⁹⁾、子ども期のゆがんだ認知^{14) 20)}、年齢^{13) 19) 29) 31) 32) 33)}、低学歴^{5) 29) 34) 35) 36)}、外国籍³⁷⁾、宗教心の低さ²⁹⁾、母親の低自尊感情^{29) 31)}、自己愛³⁸⁾、被害的・否定的認知³⁹⁾、暴力の結果の知覚²³⁾、攻撃性^{13) 17)}、母親の怒り²⁹⁾、母親の不満足感²⁹⁾、母親の反社会性²⁹⁾、情動制御⁴⁰⁾、真面目⁴¹⁾、几帳面⁴¹⁾、完全癖⁴¹⁾、こだわり症⁴¹⁾、なにごとにも一途・一生懸命にやろうとするため、思うようにできないと落ち込んだり、イライラとパニックを起こしやすい情緒未成熟な幼いタイプ^{41) 42)}、低い養育の質²⁹⁾、子どもとの関わり^{27) 40)}、子どもへの愛着形成が不十分¹³⁾、DV^{13) 31) 37)}、父親の参加度の低さ^{29) 41)}、父親の温かさの低さ²⁹⁾、配偶者との関係^{13) 17) 43)}、母親の愛情の低さ²⁹⁾、対児感情⁴⁴⁾、母性意識否定感³¹⁾、「母性愛」信奉傾向^{45) 46)}、育児葛藤²¹⁾、育児セルフエフィカシー²²⁾、育児不安^{13) 41) 42) 43)}、育児ストレス^{13) 23) 27) 37) 44) 47)}など、挙げればキリがない。

次に、子どもの持つリスク因子としてはどんなものが挙げられるか。よく言われるのが扱いにくい子ども^{13) 14) 19) 42)}である。これはつまり、病気や行動の異常さにより容易に養育できない子どもを指す。その他、乳幼児¹³⁾、子どもの出生順位⁴²⁾、女兒（性的虐待に多い）⁵⁾、早産¹⁴⁾、低体重^{13) 14) 19) 28)}、望まれない子ども^{5) 13) 14)}、障害児^{5) 13) 15) 19) 48) 49)}、慢性疾患の存在¹⁹⁾、多動¹⁹⁾、発達の遅れ¹⁹⁾、難しい気質⁵⁾などといったものがある。

最後に、社会の持つリスク因子としてはどんなものが挙げられるか。これについてはさらに社会文脈

的要因と社会文化的要因に分類できる。まず社会文脈的要因としては、社会経済的地位 (SES) の低さ^{5) 14) 29) 34) 36) 47) 50)}、無職^{14) 35)}、生活保護^{28) 29)}、社会的孤立^{13) 14) 47) 48) 51)}、より広いコミュニティとの接触が制限されている⁵¹⁾、子育てをサポートしてくれるシステムの不足^{22) 42)}、家族の大きさ^{14) 29)}、片親^{13) 14) 28) 29) 35)}、子連れ再婚¹³⁾、子どもの人数^{14) 28) 42) 47)}、人間関係の問題を抱える家庭¹³⁾、親戚とトラブルが多い⁵¹⁾、家族内の安定性と安全性³⁵⁾などが挙げられる。そして社会文化的要因としては、「母性信仰」「三歳児神話」などの社会的通説によるプレッシャー⁴²⁾や赤ちゃん部屋のゴースト²⁰⁾といったものが虐待のリスクとして挙げられている。

以上のように、子ども虐待を引き起こす要因というのは非常に多くのものが考えられている。そして先述のように、これらが複雑に絡み合って虐待という行為に結びつく。従ってこれらのリスク因子について単純にそれを「リスク」として扱うことはできず、虐待発生のメカニズムに関しては、このように列挙する以上の示唆を得ることは非常に困難である。そこで本論文でも列挙のみにとどめることとする。

C. 子ども虐待の一次予防

前節で挙げた要因によって発生した子ども虐待とは、子どもの発達や発育、健康に望ましくない影響を及ぼす^{3) 4) 5)}ものであり、その予防が必要とされるであろう。では、実際どのような予防が為されているのか。そもそも虐待の予防とは、次の三種類に分類できる。虐待が起きないようにする一次予防、今起きている虐待を止める二次予防、すでに虐待を経験した当事者が再び虐待を受けたりすることを防止する三次予防である⁹⁾。具体的に、一次予防としては、児童相談所による予防啓発、Nobody's PerfectやTriple Pといった教育プログラムの実施、保健士による家庭訪問といったものがある。二次予防としては、児童相談所で電話通報を受けた際の早期介入等、様々な動きがある。そして三次予防としては、児童相談所による一時保護や里親制度等がある。こうした中で筆者は、虐待を未然に防がなければ、この虐待の増加を食い止めることはできないだろうと考える。また、1970年代から、「普通の」親でも虐待をすると考えられるようになった⁵²⁾。そこで、普通の親を対象とした一次予防こそが求められているのではないかと考える。しかし実際、上述のように一次予防は既に為されている。では、既に為されているにも関わらず子ども虐待が減少しない、その

原因はどこにあったのか。簡単に従来の一次予防の効果についての先行研究を参照し、その問題点について検討したい。

例えば、Chislett, Kennett (2007)⁵³⁾の研究では一次予防としての教育プログラムであるNobody's Perfectの効果について検討している。その結果、親子相互作用、養育能力や満足感などに正の、怒りや懲罰的養育に負の効果があったとされ、一次予防としての効果を示しているように思える。しかし、研究参加者の半数が片親であるというように有リスク者を対象としており、本論文で目指すような、より一般の親を対象とした一次予防というのに合致しない。すなわち、これでは目立ったリスクのある家庭にとっては効果のある予防であるとしても、一般家庭にとってもまた効果があるかということが分からずじまいである。Olds et al. (1997)⁵⁴⁾の研究では一次予防としての家庭訪問の効果について検討している。彼らは、第一子を妊娠中の母親を次の4群に分類し、その後縦断研究として子どもが成長した時の虐待の報告について調査した。群分けは、子どもが12・24か月時にスクリーニングし、必要であれば診察し、訪問はしない第一群、子どもが2歳になるまで、第一群の内容に加え、専門機関に行くための交通機関を自由に使えるようにし、訪問はしない第二群、妊娠中に保健士が訪問し、後は第二群同様である第三群、第三群の内容に加え、子どもが2歳になるまで保健士が訪問する第四群であった。その結果、第一群と第二群（統制群）、第四群（訪問群）間で子ども虐待の報告数に有意差があった。つまり、これも一次予防としての効果があったというものであった。しかし、やはりその参加者は妊娠時に19歳未満であるか、片親であるか、社会経済的地位 (SES) が低いというリスクのうち、少なくとも1つは有している集団であり、上の研究同様、本論文で追及する、より一般の親を対象とした一次予防に合致しない。これらの研究のように、多くの一次予防はリスクのある家庭を対象としたものである。ここで、予防研究の先駆けとなったコミュニティ心理学における一次予防の考え方も参照する。そうすると、その対象というのはやはり、「何の兆候もない個人」である⁵⁵⁾。しかしここまで概観してわかるように、虐待の一次予防では「兆候のある個人」を対象としており、コミュニティ心理学で考えられてきた一次予防の考え方に矛盾している。そこで、本論文では、元来考えられ、必要とされてきた一次予防の考え方に近づけるため、より一般の親を対象とした一次予防について考えていきたい。

2. 「育児不安」への着目とその定義

A. 「育児不安」への着目

では、実際、何に焦点を当てた予防がより一般の親に対して効果があるのか。先述の虐待のリスク因子のほとんどは、親が若いとか、片親であるといった不変の環境や、親の抑うつなどといった不変の特性である。これらについてサポートし「改善しよう」として、できるものではないし、やはりこれでは「兆候のある個人」を対象とすることとなる。より一般の親が持ち、サポートによって変え得るリスクに着目することが、より多くの親を対象とする一次予防につながるのではないか。では、何であればサポートすることによって改善の余地があるのだろうか。そこで本論文で着目するのが、育児不安（後述するが、これは「育児ストレス」と呼ぶこともある）である。これというのは、育児中の母親が多かれ少なかれ抱くものと考えられる。実際、子どもの虐待防止センターへの電話相談の内容として、育児不安に関するものが8割を占めるという報告もある⁵⁶⁾。つまり、育児不安とは、虐待へ至る初期の背景要因として広くあるものなのではないかということも考えられるのだ。従って本論文ではこの育児不安に着目し、子ども虐待一次予防への示唆を得たいと考える。

B. 「育児不安」の定義

本論文で「育児不安」を扱うにあたり、先にその定義を明確にする必要があるだろう。

まず、この「育児不安」について研究上で最初に扱った牧野（1982）によると、「子どもの現状や将来、或いは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態また無力感や疲労感、或いは育児意欲の低下などの生理現象を伴ってある期間継続している情緒の状態、或いは態度を意味する。」とされており、その後の多くの育児不安研究でこの定義が参照されている。そしてその後の研究でさらなる考察が行われた。住田（2001）は育児不安を次の4つに分類している。まず一つが「育児についての不快感情」ということで、母親が、コミュニケーションできない乳幼児に対して心身の状態を押し量り、絶えず注意を払っていないなければならないのに対し、子どもは母親のそうした気苦労や心労に何ら頓着することなく勝手気ままに「行動」するため、子どもを疎ましく不快に感じる状態を指す。二つ目は、「子どもの成長・発達についての不安」ということで、乳幼児の身体的成長や精神的

発達の明確な基準がなく、子どもが順調に育っているか否かを確認することができないために不安に襲われる状態を指す。三つ目は、「母親自身の育児能力に関する不安」とされ、育児行為の重圧により母親自身の育児能力に不安を感じ、育児行為そのものに恐れを感じるようになるという状態を指す。そして四つ目は、「育児負担感・拘束感による不安」とされ、今日の女性の社会進出という風潮に対し、育児は日常的な、そして反復的な継続行為であるため、現実と自己との間に齟齬を感じ自己疎隔的な状況に陥っていく状態を指す。また、渡辺・石井（2005）⁵⁷⁾による下位分類では、「否定的育児感情因子」、「育児抑制因子」の2つに分類されている。この内容については3章A節の尺度の検討において詳述する。それから、吉永（2007）⁵⁸⁾が挙げた、1か月健診でよく聞かれる心配事というのも「育児不安」として8分類されているため、以下に列挙する。一つ目が、「哺乳」とされており、「授乳中のむせ、げっぷが出ない、溢乳、母乳授乳に1時間かかる、母乳・ミルクが足りているか、授乳中の呼吸不良、ミルク追加の是非、げっぷ後の嘔吐、頻回母乳授乳、湯ざまし・麦茶、授乳回数」といったものが内容例としてある。二つ目が、「排便」とされており、「うんちが硬い、緑色の便、血便、便秘、排便の回数、便が黄色い」といったものが内容例としてある。三つ目が、「生活」とされており、「しゃっくり、びくつとする、夕方から泣き出す、背伸びしてビクビクする、母の体調不良、父親の育児不参加、抱き癖、実家から戻るのが不安、手がかからなすぎる、上の子の乱暴、ちくでき」といったものが内容例としてある。四つ目が、「睡眠」とされており、「寝ている間うなる、昼夜逆転、夜に寝ない、なかなか起きない、夜泣き、寝かせると泣く、睡眠中手が冷たい」といったものが内容例としてある。五つ目が、「呼吸の様子」とされており、「鼻づまり、ゼーゼーいう、啼泣時チアノーゼ」といったものが内容例としてある。六つ目が、「目」とされており、「眼脂（目やに）、目のゴミ、目は見えているのか」といったものが内容例としてある。七つ目が、「皮膚の心配・外見の異常」とされており、「イチゴ状血管腫、乳児湿疹、嘔吐・吐乳、湿疹、サーモンパッチ、爪が曲がっている、顔のかさかさ、外陰部の胎脂、おむつかぶれ、異所性蒙古斑、肛門周囲膿瘍、後頭部の母斑、肛門上にくぼみ、副乳」といったものが内容例としてある。そして八つ目が、「その他の異常の心配」とされており、「陰囊水腫、眼脂、股関節脱臼の心配、腹部膨満、うなり、心雑音、水痘羅

患、上の子が伝染病、胸部剣状突起、でべそ、腸内ガス充満、黄疸、おっぱいにしこり、頭部変形、向き癖、真珠腫、臍ヘルニア」といったものが内容例としてある。

以上のように、「育児不安」については定義もその内容も多様であり、母親の不安の状態に言及するもの、具体的な不安の対象に言及するもの等、様々な視点が考えられる。本論文では子ども虐待のリスクとなり得る「育児不安」に着目する。そのため、具体的な不安の内容や対象を限定したものではなく、育児不安の状態により焦点化したいと考える。そこで本論文における「育児不安」の定義としては、「育児において子どもの状態や将来、自分の育児の仕方等について過度に恐れや不安を抱くこと」とする。

ここで、先行研究において「育児不安」と同義語として「育児ストレス」も挙げられている^{57) 59)}ため、前章の虐待のリスク因子としてはこれらを別々に表記したが、以下からレビューする際は「育児不安」に加え、「育児ストレス」も検索語として使用した。

3. 「育児不安」の再考

A. 「育児不安」尺度の検討

「育児不安」という概念の中身をより詳細に検討するため、いくつかその尺度の項目を概観したい。前章でも述べたように、「育児不安」という概念を提案した牧野(1982)の尺度を最初に見てみることにしよう。それは5因子に分類されており、それぞれ「一般的疲労感」、「一般的気力の低下」、「イライラの状態」、「育児不安徴候」、「育児意欲の低下」と命名されている。さらにそれぞれの項目を見てみると、「一般的疲労感」因子では「毎日くたくたに疲れる」、「朝、目覚めがさわやかである(逆転項目)」というように日常生活における疲労の程度を問うものが含まれる。「一般的気力の低下」因子では「考え事が億劫で嫌になる」、「毎日張り詰めた緊張感がある」というように普段の物事への動機づけの低下を測るものが含まれる。「イライラの状態」因子は「生活の中にゆとりを感じる(逆転項目)」、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」というように気持ちにどれぐらいゆとりがあるかを問うている。「育児不安徴候」因子では「自分は子どもをうまく育てていると思う(逆転項目)」、「子どものことで、どうしても良いかわからなくなることがある」、「子どもは結構一人で育っていくものだと思う(逆転項目)」、「子どもをおいて外出するのは、心配で

仕方がない」というように育児の仕方や信念に関する項目となっている。そして「育児意欲の低下」因子では「自分一人で子どもを育てているのだという強迫感を感じてしまう」、「育児によって自分が成長していると感じられる(逆転項目)」、「毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う」、「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」というように「一般的気力の低下」因子の育児版といった内容となっている。これが初期の、「育児不安」測定の基準であった。しかし、よく見てみるとその内容はなにも「育児」に限ったものではなく、育児をしている母親の生活一般に関する不安を測定しているという印象がある。では、その後この「育児不安」がどのように変化してきたのか。また具体的な尺度をいくつか挙げてみる。

前章で育児不安の4分類を行ったということで紹介した住田(2001)によると、4因子それぞれの項目は次のように、まさに前章で定義した内容を表すものとなっている。「育児についての不快感」因子には「子どもがわずらわしくてイライラする」、「子どものことを考えるのが面倒になる」、「自分の子どもでも可愛くないと感ずることがある」など5項目が含まれる。「子どもの成長・発達についての不安」因子には「自分が思っているように子どもが成長しないので成長が遅れているのではないかと思う」、「子どもが病気になるか心配する」、「子どもが事故にあわないか心配する」、「育児書や育児雑誌の内容と比べて自分の子どもが遅れているのではないかと思う」などの4項目が含まれる。「母親自身の育児能力に関する不安」因子には「育児のことでどうしても良いか分からないことがある」、「他のお母さんの育て方と比べて自分の育て方で良いのか不安になる」など4項目が含まれる。「育児負担感・拘束感による不安」因子には「子どもに時間を取られて自分のやりたいことができずイライラする」、「友人や知人が充実した生活をしているようなので焦りを感じる」など4項目が含まれる。以上のように、牧野(1982)の尺度においては「一般的疲労感」因子のように、育児に関わらない項目も含まれていたのに対し、住田(2001)では、より「育児」に焦点化した内容となっているように感じられるだろう。

また、手島・原口(2003)⁶⁰⁾により作成された育児不安尺度では第一因子として「中核的育児不安因子」、第二因子として「育児感情」、第三因子として「育児時間」とされている。具体的にその項目内容は、第一因子で「なんとなく育児に自信が持てない」、「どうしつけたらよいかわからない」、「育児についていろいろ

心配なことがある」,「子どもの発育・発達が気にかかる」,「よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくしたりする」などの8項目,第二因子で「子どもをわずらわしいと思うことがある」,「子どもを育てることが負担に感じる」,「子どもを産まなければ良かったと思う」,「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」,「育児意欲がない」などの8項目,第三因子で「自分の時間がない」,「子どものために仕事や趣味を制約される」,「家事を全てする時間がない」,「毎日同じことの繰り返しをしている」など6項目が含まれる。項目の内容だけ見れば住田(2001)とそう変わらないという印象があり,第一因子で不安の内容,第二因子で育児において感じることで,第三因子で不安になる原因の一つである負担感や拘束感を表している。ただ,ここで「虐待に関する不安」が新たな項目として含まれているのも注目すべきであろう。しかしこれについては後述することとし,先に前章で紹介した渡辺・石井(2005)⁵⁷⁾による尺度項目も紹介する。「否定的育児感情因子」では「何となく育児に自信が持てない」,「どうしついたらよいかわからない」,「育児についていろいろ心配なことがある」,「子育てに失敗するのではないかと思うことがある」,「子どもをわずらわしいと思うことがある」,「よその子どもと比べて,落ち込んだり,自信をなくしたりすることがある」,「子どもの発育発達が気にかかる」,「子どもを生まなければよかったと思う」,「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」,「育児意欲がない」などというように,育児において感じる様々な領域での否定的な感情が問われている。そして「育児抑制因子」では「子どものために仕事や趣味を制約される」,「自分の時間がない」,「毎日同じことの繰り返しをしている」,「家事を全てする時間がない」などというように,育児により自分の行動が制限されているということの認識が問われている。これらの項目を見て気付くように,やはり項目の内容としてはさほど変化しておらず,因子の在り方,つまり分類の仕方が異なっているだけといった印象がある。例えば,住田(2001)の「育児についての不快感情」因子と「子どもの成長・発達についての不安」因子,「母親自身の育児能力に関する不安」因子をまとめて「否定的育児感情因子」とし,「育児負担感・拘束感による不安」因子を「育児抑制因子」と言い換えたように感じる。ただ,この尺度の特徴としては,手島・原口(2003)⁶⁰⁾同様,項目の一つに,「虐待に関する不安」を問うものが含まれていることである。これというのは,2000年に児童虐待の防止等に関

する法律が制定され,2004年に改定されたことや,それによる「子ども虐待」のさらなる普及といった時代背景を反映しているのではないかと考えられる。

以上のように,「育児不安」については研究者によってその測定基準としての分類の仕方が多様だ。牧野(1982)のように,育児だけでなくそれ以外の生活に関するネガティブな反応を問うものや,住田(2001)のように細かい基準を設け測定するもの,渡辺・石井(2005)⁵⁷⁾のように住田(2001)の内容をまとめたものもある。またさらに,上述のように手島・原口(2003)⁶⁰⁾や渡辺・石井(2005)⁵⁷⁾において「虐待に関する不安」を問う項目が加えられたことから,「育児不安」が時代とともにその内容を変化させているということも考えられよう。従って,現在の母親が抱える「育児不安」を正確に捉える必要があり,その時代に合わせて尺度を作成し,測定していくことが,量的に「育児不安」を捉える際,重要となってくるのではなかろうか。

ここで,「育児不安」をスクリーニングする尺度として吉田ら(1999)が作成し,林田・中・深田・草野(2003)⁶¹⁾が改編した尺度もあるため,参考のため簡単に紹介したい。彼らは「育児不安」をスクリーニングする基準として,「育児の喜び」,「育児負担」,「夫のサポート」,「自信のなさ」,「子どもの育てやすさ」,「相談相手の有無」が育児不安と関連が深いだろうということで,これらを想定し,尺度を構成した。これらの育児不安スクリーニング基準は,その内容から,子ども虐待のリスク因子,または,本論文では説明しなかったが,虐待発生を抑制するとされる補償因子ともなり得る。すなわち,子ども虐待のスクリーニングとしても使用されるものと考えられる。つまりこのことから,「育児不安」が子ども虐待と強く結びついているというのは,予測されることであると言える。従って,子ども虐待の予防に向け,この「育児不安」についてより詳細に検討していく価値はあるだろう。

B. 「育児不安」研究の動向

実際にこの「育児不安」は先行研究においてどのように扱われてきたのか。これは,大きく分けて二種類ある。子ども虐待のリスク因子研究のように,育児不安を導く要因を検討するもの。そして,育児不安によってどのような行動や情動状態になるかということを検討するものである。

では,まず育児不安を導く要因を検討した先行研究を,発表年順にいくつか紹介していこう。

Akazawa et al. (1999)⁶²⁾ は、育児不安を引き起こす要因を探るため、3歳児健診に来た母親を対象に、育児に不安を感じるか否かということを問うた上で、リスクとなり得る項目への回答を求めた。その結果、育児に不安を感じない母親が16.0%であるのに対し、育児に不安を感じる母親は51.1%であった。そして回帰分析によると、.05水準で、母親の年齢、子どもの数、出生順、妊娠時の異常、複雑な出産、子どもの病気、病気の疑い、アトピー性皮膚炎、母親の職業が有意であった。そこで筆者らは育児不安を和らげるような環境の必要性を示唆していた。ただ、この研究は非常に簡素な考察のみにとどまっており、育児不安を問う項目も「育児不安を感じるか否か」のみであったため、育児不安の具体的な内容や、それと関連のある要因に関する詳細な検討が必要であると感じた。

溝田 (2003)⁶³⁾ もやはり育児不安を引き起こす要因を探るのだが、「母親観」というものに着目し、それが「意識」レベルと「行動」レベルで構成されているとし、どのように育児不安に影響を及ぼしているかについて検討した。まず、0-3歳児の母親を、意識レベルと行動レベル共に現代的であるⅠ型、意識レベルでは現代的だが行動レベルでは伝統的であるⅡ型、意識レベルでは伝統的だが行動レベルでは現代的であるⅢ型、意識レベルと行動レベル共に伝統的であるⅣ型に分類した。そして前章で紹介した住田 (2001) の尺度を用いて育児不安を測定した。その結果、この尺度の下位分類についてそれぞれの群間の差は、「育児についての不快感情」についてⅡ>Ⅳ>Ⅲ>Ⅰで.01水準で有意差があり、「育児負担感・拘束感による不安」についてⅡ>Ⅳ>Ⅰ>Ⅲで.01水準で有意差があった。そしてさらに「育児のことでどうしたら良いか分からない」という項目のみⅡ>Ⅳ>Ⅲ>Ⅰという順で有意差があった。つまり、意識レベルではどうであれ、行動レベルで伝統的な「母親らしく」振舞おうとする母親の方がこれらの育児不安を抱く。この研究は、従来考えられてきたような育児不安を導く要因に、「母親観」という新たな視点を加えることとなり、しかもそれを意識レベルと行動レベルで分類したという点で興味深い研究であったと言える。これは女性が社会に進出したという状況が育児不安に影響を与えているということで、本論文で述べている、育児不安が時代と共に変化するという主張を支持する研究でもあった。

岡本 (2003)⁶⁴⁾ は、母親の生活習慣や育児状況、父親の育児行動の現状が、いかに育児不安に影響を及ぼしているかについて、親子クラブに参加している母親

を対象に検討した。その結果、育児不安に強い影響を及ぼした要因は、順に、母親の自覚的不健康、近所付き合いのなさ、母親の治療中の疾患の有無、父親の育児行動への不満足、サポートのなさ、不健康な生活習慣であった。これは母親の健康状態や、育児へのサポートの重要性を示しているという点でこれまでの先行研究を追認したものであった。

武井・寺崎・門田 (2006)⁶⁵⁾ は、育児不安を導く要因として、子どもの気質に着目した。そして1歳児の母親を対象に質問紙調査を行った結果、否定的感情反応を示す子どもは扱いにくく、養育者は育児への自信をなくし（中核的育児不安）、育児への否定的な感情が高まった（育児感情）。また、睡眠や食事時間が安定しない気質傾向（規則性）やマイペース（神経質）の子どもをもつ養育者は常に子どもの対応をしているため、育児に費やす時間が増え、自分の時間や行動が制限されていると感じ、不安となっていた（育児時間）。この研究では、育児不安を導く要因として子どもが持つものに着目した研究の少なさを指摘し、検討を行った。従って、育児不安を考える際、親だけでなく、子どもの側の要因も考慮しなければならず、支援する際にも子どもへのアプローチも必要だということを明らかにしたという点で意義深い研究であった。

Arimoto and Murashima (2007)⁶¹⁾ は、育児不安を導く要因を探ることを目的として、日本の1歳半健診に来た母親を対象に質問紙調査を行った。その結果、.001水準で抑うつ傾向、養育不満足感、夫からのサポートやソーシャルサポートネットワークのなさが育児不安に影響を及ぼしていた。従って、これもこれまでの先行研究で明らかとされてきたことを支持するものであった。

ここまでの研究でわかるように、育児不安を引き起こす要因、つまり、育児不安のリスク因子についてもやはりBelsky¹⁴⁾ が子ども虐待のリスク因子について分類したように、親の持つもの、子どもの持つもの、社会の持つものに分類できると考えられる。そして、それらは複雑に絡み合い、単純に「メカニズム」として提示できないということが予測される。

次に育児不安がどのような結果を導くかを検討した先行研究を発表年順にいくつか紹介していこう。

Rodgers (1993)⁶⁶⁾ は、先行研究において、生活ストレスと育児ストレスの区別が明確でないという問題点を挙げている。これはつまり、牧野 (1982) のように、尺度の中で問うているものが、育児に限らない生活全般に関するストレスであったのだらうと推察さ

れる。そこで、育児ストレス、育児行動、親の症候、ソーシャルサポートについて質問紙を用いて幼児の母親を対象に調査を行った。その結果、育児ストレスが育児行動に、そして育児ストレスが親の症候に.01水準で有意に正の影響を及ぼしていた。そしてさらに、ソーシャルサポートが.05水準でこれらのバッファーとなっていた。ただ、この研究では、育児ストレスや育児行動の内容に関する記述がないため、具体的に育児ストレスが高まることによってどのような育児行動に出るのかということについてはわからない。また、サンプル数も85名とやや少なめとなっているといった問題点もある。

岩立・倉田(1995)⁶⁷⁾は、育児ストレスと望ましくない育児行動の関連について質問紙を用いて調査した。その結果、育児ストレスが高い群は低い群に比べ、望ましくない育児行動が多かった。この「望ましくない育児行動」というのは、例として「子どもを思わず叩いてしまうことがある」という項目が示されていたが、やはり上の研究同様、内容が分かりにくくなっていた。「望ましくない育児行動」と言っても、おそらく例の様に体罰的なものもあれば、育児拒否のようなものもあると考えられる。従って、より詳細な記述、そして検討が必要であると感じた。

Taylor, Guterma, Lee, and Rathouz (2009)³⁷⁾は、DV(ドメスティック・バイオレンス)に焦点を置いた研究ではあるが、その中で、母親のDV経験と育児ストレスの交互作用が子ども虐待を予測するということを示した。Clement and Chamberland (2009)²³⁾は、子どもへの体罰を予測する要因を明らかにするため、0-17歳の子どもを母親を対象に質問紙調査を行った。その結果、育児ストレスが体罰を予測するという結果が得られた。これもやはり親の育児ストレスが親から子どもへの不適切な行動を予測した。Lee, Perron, Taylor, and Guterma (2011)²⁷⁾は、父親による子どもへの体罰を予測する変数を明らかにすることを目的とし調査を行った。その結果、上研究同様に育児ストレスが体罰を予測していた。ただこれに関しては、育児ストレスが抑うつ傾向を媒介し、体罰に影響を与えているのではないかとこの考察が為されており、今後の研究の必要性を示唆していた。

以上のように、様々なリスクにより引き起こされた育児不安(育児ストレス)が、育児行動に望ましくない影響を与えるということが示されてきている。そこで、この育児不安に対する支援というのが子ども虐待の予防という文脈でもやはり必要とされている。しか

し、先行研究では上述のように育児不安と不適切な養育行動についての詳細な検討が少ないといった印象があり、さらに、育児不安に対する支援の必要性が示唆されるのみにとどまっており、具体的な支援の方法等は考えられてこなかったというのが現状である。従って、そろそろ、育児不安に対しどのような支援ができるのかということを考えていくべき時なのではなかろうか。

C. 「育児不安」の新たな形

近年、女性の社会進出や核家族化の進行など、社会や家族の在り方が大きな変化を遂げている中で、育児の在り方も同時に変化していると考えるのが妥当であろう。そして、その育児に伴う不安というものも変化をしてきているだろうということは容易に予測でき、本論文の中でも何度か述べてきた。特に「子ども虐待」という文脈で考えれば、それはメディア等を通して広く普及してきているということから、新たに「虐待に関する不安」というのも何かしら生じ、普及しているのではなかろうかということが、尺度の検討を行った際にも考えられた。石川県の母親を対象とした意識調査⁶⁸⁾によると、「叱りすぎや虐待ではないか」という項目に対し、「非常に思う」または「まあ思う」と回答した者が60%近くいた。また、乳幼児健診に来た母親が「虐待的であることへの恐れ(fear of being abusing)」について相談するということが増えているという報告もある⁶⁹⁾。

このように、時代と共に「育児不安」の下位分類にも新たな分類の可能性が生じるのではなかろうか。従って、時代を反映した「育児不安」の検討と尺度の構成を考えていくべきであろう。そして、その上で新たな「育児不安」と実際の育児行動との関連がどのようなものであるのか、今後また検討していく必要があるだろう。

4. 子ども虐待予防への示唆

本論文では子ども虐待についてより多くの人を対象とした予防をするため、どのようなことに焦点を当てるべきか考えた時、より多くの人を持ち得る「育児不安」に着目してみてもどうかということで、その先行研究をレビューした。その結果、多くの研究で育児不安が望ましくない育児行動を予測するということは示されているものの、では、育児不安がどのように望ましくない育児行動を予測し、どのように効果的に支援

するかということは示されてこなかった。

この「育児不安」というものは時代と共に変化し得るものであり、その概念は定まったものではないと言っても過言ではなからう。よって、それぞれの時代の「育児不安」を考えていく必要がある。特に近年は「子ども虐待」の普及に伴い、「虐待に関する不安」というものの存在も想定されるため、「育児不安」について質的に検討をし、現代に合致した概念の構成を行っていくべきではなからうか。その上で、現代の「育児不安」、特にもし存在するのであれば「虐待に関する不安」と不適切な養育との関連を分析し、子ども虐待の一次予防として、それにアプローチするような効果的なプログラムの具体的な考案をしていかなければならないのではなからうか。

(指導教員 遠藤利彦准教授)

5. 謝辞

本論文執筆にあたりご指導・ご助言いただきました遠藤利彦先生に、心より感謝申し上げます。

6. 注及び引用文献

- 1) 詳細については厚生労働省第7次報告参照
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001j1q1l-att/2r9852000001j1q1l-att.pdf>
- 2) 田中理絵 2011 社会問題としての児童虐待—子ども家族への監視・管理の強化— 教育社会学研究 第88集 119-138
- 3) Gayla Margolin and Elana B. Gordis 2000 THE EFFECTS OF FAMILY AND COMMUNITY VIOLENCE ON CHILDREN Annu. Rev. Psychol 51 445-479
- 4) 大原天青・楡木満生 2008 児童自立支援施設入所児童の行動特徴と被虐待経験の関係 発達心理学研究 第19巻 第4号 353-363
- 5) Ruth Gilbert, Cathy Spatz Widom, Kevin Browne, David Fergusson, Elspeth Webb, Staffan Janson 2009 Burden and consequences of child maltreatment in high-income countries Lancet 373 68-81
- 6) 高玉和子 1991 児童虐待問題に関する一考察(1)—虐待概念の定義— 駒沢女子短期大学研究紀要 第24号 21-27
- 7) Christina Paxson and Ron Haskins 2009 Introducing the Issue The Future of Children Vol.19 No. 2 3-17
- 8) John F. Knutson 1995 Psychological characteristics of maltreated children: putative risk factors and consequences Annual Review of Psychology Vol.46 401-431
- 9) 森田ゆり 新・子どもの虐待生きる力が侵されるとき 岩波ブックレット No.625 2006
- 10) 奥山真紀子 2003 攻撃性と脆弱性—不適切な養育をめぐる— 児童青年精神医学とその近接領域 Vol.44 No.2 62-66
- 11) 花田裕子・永江誠治・山崎真紀子・大石和代 2007 児童虐待の歴史的背景と定義 保健学研究 19(2) 1-6
- 12) Ann S. Masten, Margaret O'Dougherty Wright 1998 Cumulative Risk and Protection Models of Child Maltreatment Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma 2:1 7-30
- 13) 田中理絵 2011 社会問題としての児童虐待—子ども家族への監視・管理の強化— 教育社会学研究 第88集 119-138
- 14) Jay Belsky 1978 THREE THEORETICAL MODELS OF CHILD ABUSE: A CRITICAL REVIEW Child Abuse & Neglect Vol.2 37-49
- 15) 猪原則行・伊藤泰雄・薩摩林恭子 1986 被虐待児症候群とその背景に関する一考察 日本小児外科学会雑誌 第22巻 第7号 65-71
- 16) Joan Kaufman and Edward Zigler 1987 DO ABUSED CHILDREN BECOME ABUSIVE PARENT? Amer. J. Orthopsychiat 57 (2) 186-193
- 17) 中嶋みどり 2004 非臨床群の母親における児童虐待相当行為に関連する心理学的要因の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 第53号 249-259
- 18) Dario Maestripieri 2005 Early experience affects the intergenerational transmission of infant abuse in rhesus monkeys PNAS Vol.102 No.27 9726-9729
- 19) 野呂健二 2001 虐待が子どものこころに残す影—世代間連鎖を断つための子どものケアのために— 保健の科学 第48巻 第11号 847-850
- 20) 後藤秀爾 2006 児童虐待加害親の心理—初期介入と予防のための理解に向けて— 愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇 第6号 19-33
- 21) N Hindley, P G Ramchandani, D P H Jones 2006 Risk factors for recurrence of maltreatment: a systematic review Arch Dis child 91 744-752
- 22) 花田裕子・永江誠治・大石和代・本田純久 2007 潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度の基準関連尺度による信頼性・妥当性 保健学研究 19(2) 51-58
- 23) Marie-Eve Clement, Claire Chamberland 2009 The Role of Parental Stress, Mother's Childhood Abuse and Perceived Consequences of Violence in Predicting Attitudes and Attribution in Favor of Corporal Punishment J Child Fam and Stud 18 163-171
- 24) Fenfang Li, Meripa T. Godinet, Pam Arnsberger 2010 Protective factors among families with children at risk of maltreatment: Follow up to early school years Children and Youth services Review Vol.33 Issue.1 139-148
- 25) Katija Kalebic Jakupcevic, Marina Ajdukovic 2011 Risk factors of child physical abuse by parents with mixed anxiety-depressive disorder or posttraumatic stress disorder MENTAL HEALTH 52 25-34
- 26) Denis Hien, Lisa R. Cohen, Nathilee A. Caldeira, Peter Flom, Gail Wasserman 2010 Depression and anger as risk factors underlying the relationship between maternal substance involvement and child abuse potential Child Abuse & Neglect 34 105-113
- 27) Shawna J. Lee, Brian E. Perron, Catherine A. Taylor, Neil B. Guterman 2011 Paternal Psychosocial Characteristics and Corporal Punishment of their 3-Year Old Children J Interpers Violence Vol.26 No.1 71-87
- 28) Samuel S. Wu, Chang-Xing Ma, Randy L. Carter, Mario Aries,

- Edward A. Feaver, Michael B. Resnick, Jeffrey Roth 2004 Risk factors for infant maltreatment: a population-based study *Child Abuse & Neglect* Vol.28 No.12 1253-1264
- 29) JOCELYN BROWN, PATRICIA COHEN, JEFFREY G. JOHNSON, AND SUZZANNE SALZINGER 1998 A LONGITUDINAL ANALYSIS OF RISK FACTORS FOR CHILD MALTREATMENT: FINDINGS OF A 17-YEAR PROSPECTIVE STUDY OF OFFICIALLY RECORDED AND SELF-REPORTED CHILD ABUSE AND NEGLECT *Child Abuse & Neglect* Vol.22 No.11 1065-1078
- 30) 小野善郎 2002 児童虐待における母親の精神障害の影響 児童青年精神医学とその近接領域 43 (1) 19-29
- 31) 大原美和子・妹尾栄一 2004 学童期の子をもつ母親の虐待行動とその要因 *社会福祉学* 第45巻 第1号 46-56
- 32) David M. Stier, MD ; John M. Leventhal, MD ; Anne T. Berg, PhD ; Lyla Johnson, RN ; and JoAnne Mezger 1993 Are Children Born to Young Mothers at Increased Risk of Maltreatment? *PEDIATRICS* Vol.91 No.3 642-648
- 33) 毛受矩子 2009 高齢出産の母親がもつ医学的社会的諸課題の分析 四天王寺大学紀要 第47号 245-261
- 34) Terri Combs-Orme, Lisa Martin, Greer Litton Fox, Catherine A. Faver 2000 Risk for Child Maltreatment: New Mothers' Concerns and Screening Test Results *Children and Youth Services Review* Vol.22 No.7 517-537
- 35) Eija Paavilainen, Paivi Astedt-Kurki, Marita Paunonen-Ilmonen, Pekka Laippala 2001 Risk factors of child maltreatment within the family: towards a knowledge base of family nursing *International Journal of Nursing Studies* 38 297-303
- 36) Jon M. Hussey, PhD, MPH. Jen Jen Chang, PhD, MPH. Jonathan B. Kotch, MD, MPH. 2006 Child Maltreatment in the United States: Prevalence, Risk Factors, and Adolescent Health Consequences *PEDIATRICS* Vol.118 No.3 933-942
- 37) Catherine A. Taylor, Neil B. Guterman, Shawna J. Lee, Paul J. Rathouz 2009 Intimate Partner Violence, Maternal Stress, Nativity, and Risk for Maternal Maltreatment of Young Children *American Journal of Public Health* Vol.99 No.1 175-183
- 38) 福島治・岩崎浩三・青木慎一郎・菊池潤考 2006 親の自己愛と子への攻撃：自己の不遇を子に帰すとき *社会心理学研究* 第22巻 第1号 1-11
- 39) 中谷奈美子・中谷素之 2006 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 *発達心理学研究* 第17巻 第2号 148-158
- 40) Elizabeth A. Skowron, JoEllen M. Kozlowski, Aaron L. Pincus 2010 Differentiation, Self-Other Representations, and Rupture-Repair Process: Predicting Child Maltreatment Risk *Journal of Counseling Psychology* Vol.57 No.3 304-316
- 41) 市川隆一郎・藪野栄子 1998 児童虐待―「育てにくさ」を訴える事例から予防を考える― 児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要 15-11
- 42) 坂口早苗・坂口武洋 2005 児童（幼児）虐待―その現状と課題― 川村学園女子大学研究紀要 第16巻 第1号 113-132
- 43) 花田裕子・坂原美保子・寺岡征太郎 2005 幼稚園に子どもを通園させている母親の育児不安と児童虐待傾向 *長崎大学医学部保健学科紀要* 18 (1) 5-8
- 44) 三島正英 2001 母親の意識にみる子どもへの虐待傾向とリスクファクターの検討 *山口県立大学社会福祉学部紀要* 第7号 1-10
- 45) 江上園子 2005 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 *発達心理学研究* 第16巻 第2号 122-134
- 46) 江上園子 2008 「母性愛」信奉傾向と母親が抱く養育信念との関連 *北海道教育大学紀要（教育学科編）* 第58巻 第2号 197-203
- 47) 大村紀子・岩谷澄香 2003 子ども虐待を考える―文献的考察― *神戸市看護大学短期大学部紀要* 第22号 105-111
- 48) 花野典子 2000 子ども虐待を生んだ家族の要因と看護の役割 *宮崎県立看護大学研究紀要* 1 (2) 66-72
- 49) 中根成寿 2007 障害は虐待のリスクか？―児童虐待と発達障害の関係について― *福祉社会研究* 第8号 39-49
- 50) Ellen E. Pinderhughes, Kenneth A. Dodge, Arnaldo Zelli, John E. Bates, Gregory S. Pettit 2000 Discipline Responses: Influence of Parents' Socioeconomic Status, Ethnicity, Beliefs About Parenting, Stress, and Cognitive-Emotional Processes *J Fam Psychol* 14 (3) 380-400
- 51) Sara J. Corse, Kathleen Schmid, Penelope K. Trickett 1990 Social Network Characteristics of Mothers in Abusing and Nonabusing Families and Their Relationships to Parenting Beliefs *Journal of Community Psychology* Vol.18 44-59
- 52) Holden, G. W. 2010 CHAPTER 12 Child Maltreatment When Parenting Goes Awry *Parenting: A dynamic perspective* London: Stage 283-307
- 53) Gail Chislett, Deborah J. Kennett 2007 The Effect of the Nobody's Perfect Program on Parenting Resourcefulness and Competency *J Child Fam Stud* 16 473-482
- 54) David L. Olds, PhD ; John Eckenrode, PhD ; Charles R. Henderson, Jr ; Harriet Kitzman, RN, PhD ; Jane Powers, PhD ; Robert Cole, PhD ; Kimberly Sidora, MPH ; Pamela Morris ; Lisa M. Pettitt ; Dennis Luckey, PhD 1997 Long-term Effects of Home Visitation on Marital Life Course and Child Abuse and Neglect *Fifteen-Year Follow-up of a Randomized Trial JAMA* Vol.278 No.8 637-643
- 55) 植村勝彦 *コミュニティ心理学 ミネルヴァ書房* 2005
- 56) 大原美和子 2002 育児不安と虐待：子育ては楽しいですか？ *国際基督教大学学報 I - A 教育研究* 44 287-294
- 57) 渡辺弥生・石井睦子 2005 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について *法政大学文学部紀要* 第51号 35-46
- 58) 吉永陽一郎 2007 育児不安と虐待 小児科診療 第70巻 3号 487-492
- 59) Azusa Arimoto and Sachiyo Murashima 2007 Child-rearing Anxiety and Its Correlates Among Japanese Mothers Screened at 18-Month Infant Health Checkups *Public Health Nursing* Vol.24 No.2 101-110
- 60) 手島聖子・原口雅浩 2003 乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度の開発 *福岡県立大学看護学部紀要* 1 15-27
- 61) 林田りか・中淑子・深田高一・草野美根子 2003 幼児をもつ母親の育児不安と疲労の自覚症状に関する研究 *県立長崎シーボルト大学看護学養学部紀要* 第4巻 65-74
- 62) K Akazawa, N Ninukawa, F Shippey, K Gndo, T Hara and Y Nose

- 1999 Factors affecting maternal anxiety about child rearing in Japanese mothers *Acta Padiatr* 88 428-430
- 63) 溝田めぐみ 2003 母親観と育児不安 九州大学大学院教育学コース院生論文集 第3号 15-30
- 64) 岡本絹子 2003 親子クラブに属する母親の育児状況と育児不安 川崎医療福祉学会誌 Vol.13 No.2 325-332
- 65) 武井祐子・寺崎正治・門田昌子 2006 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌 Vol.16 No.2 221-227
- 66) Antoinette Y. Rodgers 1993 The Assessment of Variables Related to the Parenting Behavior of Mothers With Young Children *Children and Youth Services Review* Vol.15 385-402
- 67) 岩立京子・倉田八枝 1995 育児ストレスが育児行動に及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集 37 390
- 68) 西村真実子・津田朗子・林千寿子・木村留美子・関秀俊・坂井明美・島田啓子・田淵紀子・炭谷みどり・亀田幸枝 1999 子育て不安と乳幼児の虐待の現状とその背景 大学教育開放センター紀要 第19号 121-126
- 69) Hyungin Choi, Tatsuhisa Yamashita, Yoshihisa Wada, Jin Narumoto, Hiromi Nanri, Akihito Fujimori, Haruka Yamamoto, Susumu Nishizawa, Daiki Masaki, and Kenji Fukui 2010 Factors associated with postpartum depression and abusive behavior in mothers with infants *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 64 120-127